

## セッションG フーリエ研究の現在 事後報告

世話人: 篠原洋治 (慶應義塾大学非常勤講師)

報告者: 福島知己 (帝京大学)

討論者: 金山準 (北海道大学)

報告者: 藤田尚志 (九州産業大学)

討論者: 清水雄大 (獨協大学他非常勤講師)

**セッションの趣旨**: 同題のセッションを2019年におこなったが、フーリエの『産業の新世界』(1829年初版)が福島知己会員によって邦訳・刊行(作品社、2022年6月)されたことを機に、フーリエ思想の全体像を把握することを目標に、広く会員からの意見を聞き取り、議論を深める目的で、2回目のセッションを開催することにした。今回20名ほどの参加者があり、活発な議論をすることができた。

### 〔第1報告 福島知己〕

#### 1 フーリエの理論的変遷について

フーリエの思想の基本的要素は、すでに最初の著作『四運動の理論』(1808年)の段階でできあがっており、晩年まで維持されている。それを思想以前の心的態度まで含めて要約的に述べれば、以下のように指摘できる。①文明世界と調和世界の両者を鏡にうつしたかのような対照性におく構図、②リンネの植物分類を範として森羅万象を綱、属、種に分類して理解しようとする分類学的思考、③万事を上昇-絶頂-下降という三角形の構図において安定させようとする志向など、理論以前の心的態度からはじまって、④人間行動の原理としての情念論や、⑤階級間の格差を利用した階級融和という考え方、⑥1,600人規模の共同体を世界中に簇生させることによって情念の発展を実現しようとする構想、⑦アナロジー論を貫徹させた宇宙論。

以上の要素はどの著作にも見られるが、『四運動の理論』の時代や1810年代の『大論』構想時のフーリエの思想と、『家政と農業のアソシアシオン概論』(1822年)や『産業の新世界』(1829年)など1820年代以降の諸著作とでは、理論的な構えが大いに異なっている。この変化は、理論の内的な発展、弟子たちの要請、社会経済をめぐる変化の3つの視角から説明できる。

#### 2 『産業の新世界』の前半部と後半部の断絶について

『産業の新世界』後半部には、原稿を活字にする段階で書き加えられたと考えられる箇所がある。たとえば「直轄農場」や「競合三稜倉庫」すなわち国営で営利事業を運営することによって国庫収入を増大させる構想が、唐突に挿入されている。これは当時、復古王制下、議会で論争を生んだ財政難問題に対するフーリエの応答であると考えられる。それは流通機構の整備を通じて農場を育成することが目的であり、この意味で産業の組織化を視野に入れたものである。金融資本を通じた流通の組織化によって、私的営利を目的とする商業を廃し、産業を組織化するという構想が、『産業の新世界』の完成間際に導入されている。

#### 3 ユートピアとフーリエについて

「ユートピア」という言葉は、『家政と農業のアソシアシオン概論』(1822年)のなかで、「実施する手

立ても効果的な方法ももたない善への熱望」と定義されている。フーリエによれば、その実例が経済学、政治学、道徳学といった「哲学諸学」である。すなわち、フーリエにとって「ユートピア」は、ネガティブな意味しかもたない。弟子たちは共同体実験にユートピアの実現を夢みだが、フーリエの主張に即する限り、ユートピアを別の次元に求めるべきであろう。

実際、『産業の新世界』に描かれる日常生活での出来事の記述——たまたま知り合った人とのおしゃべりがきっかけで一生涯をかける天職を発見するとか、趣味で始めた園芸が評価されその道の第一人者となるなど——は、例外的かもしれないが非現実ではない。そしてフーリエによれば、そのような可能性があることが情念のはたらきの結果なのである。もしあえてフーリエが描く世界をユートピアと呼ぶなら、産業革命の発展やバリの社会生活の急激な変化という現実のあわいに忽然と現れるきらめきのようなこれらの出来事をユートピアと呼ぶべきではないか。

## 〔 第 2 報告 藤田尚志 〕

### イントロダクション

本報告では、労働と余暇の境界、やりがいと搾取の境界が限りなく曖昧になった現代社会の重要問題に対して、先駆的洞察を展開した異形思想であるフーリエの思想について、ベルクソンの「響存(écho-sistence)」、ドゥルーズの「分人(dividuels)」の概念を参照項として召喚しながら考察した。フーリエは、情念引力の法則の解明にもとづき、個人の情動がかぎりなく満たされる社会を構想し、結婚に関して言えば、「多婚」あるいはその究極形態である「全婚」にまで拡大され、一夫一婦制はその中に吸収されると考えた。フーリエはこの意味で、いわば「結婚の脱構築」を図ったと言えるのではないか。本報告では、フーリエが、「結婚の脱構築」の歴史において、いかなる位置を占めることになるかに絞って考察した。

#### 1 情動のポリティクス (ベルクソン)

ベルクソンによれば、人間を動かす力には、圧力と憧れ、言い換えれば、義務と魅力という二つの力がある。一方の力である「圧力」「義務」によって人は強制的に動かされる。ベルクソンが強調するのはもう一つの力、「憧れ」「魅力」の方である。「憧れ」の対象となる「魅力」ある「偉大な人格」は、それ自身が「呼びかけ」であり、その「呼びかけ」に応じて他の「人格」が現れる。すなわち「響き」としての主体性が生成する。こうしたベルクソンの議論に、情動の心理学、共同性の形成という点で、フーリエとの親近性を見出すことができるのではないか。フーリエは情念による社会の再編成を企画した。フーリエによれば、諸情念の中でもっとも問題になるのが、「恋愛」である。なぜなら、文明社会においては、「恋愛」とともに集団的情念に分類される「野心」「友情」「家族愛」の拡大路線が肯定されるのに対して、「恋愛」だけが一夫一婦制と結びつき、排他的・限定的で「ひどく貧しい」制度だからだ。フーリエは、調和的社会における一夫一婦制の廃止を唱えているわけではなく、その「強制」の廃止、すなわち選択的な家族制度を構想している。

#### 2 分人性 (ドゥルーズ)

ドゥルーズは、近代社会から現代社会への移行を、「規律社会」(フーコー)から「管理社会」(ドゥルーズ)への移行と特徴づけた。「規律社会」では、個人は家族から学校へ、学校から会社へと、ある閉鎖環境から別の閉鎖環境へと移行してきたが、「管理社会」への移行とともに、個人はあらゆる事柄に関して過剰な流動性・常時接続・相互乗り入れ・相互浸透の時代を生きている。このような時代状況の変化が、

私たちの存在様態に影響をもたらしている。ドゥルーズはその変化の特徴を、「分人」という単位の出現に見ている。分割不可能な個人 *individus* が、分割によって性質を変化させる「分人 *dividuels*」となる。現在私たちは、ドゥルーズが言うように、複数の意思をもって、複数の側面をもって、マルチタスク的に生きているのではないか。

『愛の新世界』においてフーリエは、「超越愛と排他的恋愛が代わる代わる営まれる」、「全情念者」ファクマの物語を書いている。ファクマは20人の求愛者に対して博愛の精神をもって身を委ねることになるが、フーリエは、「私はファクマに、累進的超越愛に身を置く以前に、テムガン・ハントの排他的恋愛、利己的恋愛を割り当てた。」と言っている。そして、「排他的恋愛とは、ある意味で、魂が大規模な行動ないし偉業を成し遂げる合間に行われる休憩、気分転換であり、恋愛のもつ社交的特質が睡眠をとっている状態なのである。」(『愛の新世界』訳335頁)と言う。すなわち「多婚」を基調とするフーリエの調和世界では、むしろ「排他的恋愛」が気分転換となると言うわけだ。ここにフーリエが、情念にしたがった恋愛における人間関係の流動化のなかで、それを安定化させる作用を考えていたことが見て取れる。

結論に代えて：閉じた分人主義と開かれた分人主義

「閉じた分人主義」は、「私的所有」「私有」の論理を突き詰めたところに出現する。消費社会は、個人単位の支出を重視する。それは家族の解体、核家族の空中分解を進行させ、その過程で家父長制が終焉を迎える。家父長制の解体自体は寿ぐべきものであるとしても、それは同時に、個人主義の強化ときわめて息苦しい閉鎖的な「接統過剰」の空間を形成する。

「開かれた分人主義」は、逆に「共同利用」「共働」の概念に共鳴する。たとえばスポーツや芸術において、ある「才能」は、多くの人々の支えなしには開花しえなかったことに気づき、個人の獲得物、所有物とされてきたものに対して、共同利用の概念を持ち込むことが可能となり、共同体のあり方も穏やかに成り立つ。「核家族」が解体されるとしても、「家族」そのものが消滅しなければならないわけではない。血縁による「大家族」の復活でもなく、むしろ擬似家族や代理家族を含む「拡大家族」ないし「複合家族」が出現する。年齢・階級・財産に決定的に拘束されることなく、SNSなどでつながりうる社会、シェアハウスのみならず、複数の人を秘密なしに愛するポリアモリー、複数のパートナーと家族をつくるポリファミリーなどは、すでに実践されつつある。また、理論面では近年、エリザベス・ブレイクが「性愛規範性」に縛られないケアの共同体として「最小の結婚」を提唱したことも記憶に新しい。さまざまな世代をつなぎ、愛・性・家族と分離・接合可能な関係を結んだ「来るべき結婚」は、分人的思考を通してよりクリアに姿を現し、より望ましい制度設計に結実するだろう。

## 〔 討論者1 金山準 〕

討論者はプルドンを主に研究しており、プルドンを通じて見られるフーリエの思想についていくつか質問をさせていただきたい。

第1報告：福島報告について

質問1 社会学者フーリエ？

フーリエは人間を変えるのではなく、それを取り巻く「機構」を変え新しい産業社会を組織化することを考えた。そこで成立する調和の根拠を、フーリエは「神がなされたことはすべてすばらしい」(『産業の

新世界』、訳 50 頁) というように、「神」に求める。だがこの視点は、ある意味で社会科学的発想を孕んでいる。つまり、個の集積に還元できない一種独特な次元に、社会を対象化している。それゆえフランス社会学史上重要性をもつものである。少なくともプルードンが受け取ったのは、フーリエのこのような「社会学的」と言ってよい思考だったと思われる。ではいったい、フーリエのこうした発想はいかに生まれたのか。

## 質問 2 情念の転換と調和

破壊的な作用をもたらす要素を調和に至らせる仕組みがフーリエの「ユートピア」だとすれば、その「ユートピア」には精緻に作り込まれたファランジュと、「忽然と現れるきらめき」の2種類が少なくともあるということか。このふたつの「ユートピア」、すなわち「設計されたユートピア」と「きらめきのユートピア」の関係はいかなるものか。

## 第2報告：藤田報告について

### 質問 1 人は変わるのか。

ドゥルーズの「分人」、ベルクソンの憧れ、共存の議論では、個人が孤立するのではなく他者とのゆるやかな関係の中で変容していくというニュアンスを感じるが、はたしてフーリエにおいて、人が他者との関係のなかで変容するのか。そうした発想はどれくらい見られるのか。情念どうしが触発し合うのと、人間が変わっていくというのは違うのではないか。

ソシエタール教育においても人を改造するという発想がなく、能力の完全な発展を実現するものではないか。自然的なものの発展を妨げるな、という発想がフーリエにあると考えた方がよいのではないか。

### 質問 2 開かれた分人主義について

置かれる関係のなかで二つの分人が現れるとして、二つの分人のあいだに関わりがあるのでは。

フーリエにおいて、情念単位の分析と個人単位の分析が併存するが、二つ考察の関係はどのようなものであるのか。情念単位の分析を極限まで突き詰めれば、個人は、情念がいくつか入った箱のようなものにすぎないと捉えられ、個人は本質的なものでなくなってしまうのではないか。そのように考えてよいのか。

## 〔 討論者 2 清水雄大 〕

討論者はミシェル・フーコーを中心とした近現代フランス哲学・思想を研究しており、藤田報告に限定して、フーリエ解釈の是非ではなく、より一般的な質問をさせていただきたい。

## 第2報告：藤田報告について

### 1 閉じた分人主義と開かれた分人主義との違いについて

金山氏も指摘していたように、藤田氏は、フーリエの調和社会において基本的な単位が個人ではなく諸情念の組み合わせであることを論じ、ドゥルーズの概念を借りて「分人」と表現された。「管理社会」では、個々の振る舞いを分解し、空間・時間内に適当に配置する規律権力でなく、断片的な情報やデータに

還元された分人たちの調整こそが、新たな時代の統治技術になるとされていた。このように、分人の思想には一面では解放的な側面はあるものの、ドゥルーズの分人の議論は必ずしも肯定的に捉えられるものではないと思われる。藤田氏自身が引用されているように、ドゥルーズは管理社会の新しい統治の戦略について、「自分たちが何に奉仕させられているのか、それを発見する務めを負っているのは若者たち自身」なのであると言っている。つまり、新しい世代の責務は、管理社会の新しい統治の戦略を明らかにすることであると主張している。この観点から、たとえばネグリ=ハートは、「帝国」や「マルチチュード」といった闘争の主体を析出させようと努力したと考えられる。

このような視点から見ると、フーリエはある意味では「権力の装置」の思想家と捉えうる。実際、ベンヤミンは「ファランステールは人間機械装置と形容することができる。」と述べ、そこでは「数が人間を統治すべきだ。」と『パッサージュ論』で記していた。だとするとフーリエは、結局のところ、今日の統治者たちが好んで援用する思想家となってしまいう危険はないだろうか。

また藤田氏は、「閉じられた分人主義」と「開かれた分人主義」という区別が重要であり、「閉じられた分人主義」は「所有」を認めるものであるとされ、他方で「開かれた分人主義」は「シェア」を基調とした社会だと主張されるが、現実にはプラットフォーム企業が自ら構築した管理の土台を押し付け、金融資本と相まって、そこから多大な利益を引き出しているのは周知の事実ではないか。こうした状況のなかで、恋愛関係や夫婦関係は無傷でいられるのだろうか。結婚を脱構築することが、解放というよりもむしろ管理社会の流れを加速させることにならないだろうか。

ここで、ベルクソンの「閉じたもの」と「開かれたもの」の区別にまで遡ってみたい。開かれたものは、偉大な神秘家のごときひとつの人格の呼びかけによって生じ、その呼びかけによって反響、模倣、創造が展開する。この視点に立つと、フーリエの『愛の新世界』で描かれた「天使結合」におけるファクマの呼びかけは、どのように解釈できるだろうか。

ベルクソンの情念の政治学との比較でフーリエを捉えようとするならば、分人主義の閉塞・開かれは、「所有という法的形態」よりも、むしろ（クロソウスキーが「生きた貨幣」という表現で示唆した）「情念の経済学」のレベルで分析すべきでないか。また、ベルクソンの「呼びかけ」の情念は、フーリエの12の情念（とくに機械的情念と呼ばれる密謀、蝶々、複合）のうちに位置づけられるのか。あるいはその「外」に位置づけられるのか。

## 2 恋愛論と美食学の関係について

『性の歴史』に関するインタビューの中でフーコーは、古代の霊的生活（たとえば修道院生活）においては、性より食事に関する規定の方がはるかに細かかったと言っている。そして、性と食事に関する関心や生活規則の数が逆転するのは、せいぜい近世からではないのかと言っている。したがって、「結婚の形而上学」対をなす「食の形而上学」（とその脱構築）を考えてみることもできるように思われる。フーリエの美食学（ガストロゾフィー）は、当時生まれつつあった美食法（ガストロノミー）とは異なり、①健康を対象としたある種の医学であり、②ファランジュの過剰生産に見合う、人々の食欲を促す術でもあった。一言で、生産から流通、消費へと至る過程すべてを射程に収めた経済学とも言えるものであった。もしフーリエの恋愛論と美食学の関係について、コメントがあればいただきたい。

〔報告者の討論者へのリプライ〕

福島会員からのリプライ

フーリエの社会学という視点について。「社会の発見」は弟子たちにとって重要な論点であった。かれらが「社会科学 sciences sociales」というタームを機関紙に用いたことがその証左である。ただ、20世紀になってマフェゾリが「小集団社会学」というかたちで取り上げているぐらいで、この点はあまり議論されていない。

フーリエにおいて、設計主義ないし管理に見えるものはある。例えば「斡旋女性官マトロン matrone」の存在がそうである。若い男女のカップリングを按配するいわゆるお見合いお婆さんが『愛の新世界』に登場する。

他方、クロエの例は「偶然の出会い」を描いている。フーリエのなかには設計主義と偶然の両方が共存していると考えられるのではないか。

藤田会員からのリプライ

フーリエのアソシエーション論には、人間の改造という側面は確かにあって、権力との関係も含めて両義的なものである。新しいアソシエーションのなかで人間の発展がありうるかを議論しているので、設計主義ではあって、「気まぐれ」も設計主義のなかに取り入れうると考えている。したがってフーリエのなかには、危険な側面がある。と同時に、それは魅力的なものにもなっている。

金山氏の情念と個人の関係についての質問について。ドゥルーズ＝ガタリは、『アンチ・オイディプス』において、欲望のミクロ物理学、つまり欲望を部分対象レベル、分子レベルで考え、その結びつきのなかで個人を捉えるという手法をとっている。したがってそれぞれの分人は、お互いに影響を与え合っていると言えるだろう。

清水氏の「マルチチュード」に関する質問について。マルチチュードという形で現れるかどうかわからないが、フーコーのなかに、そのような抵抗の契機は考えられる。「食の形而上学」に関しては興味深い、今のところ考えていない。

## 〔フローラからの質問とリプライ〕

### 1 大塚昇三会員（北海道武蔵女子短期大学）

社会学のモデルとしてのファランジュを扱う場合、個人と情念の間にフーリエは「性格 caractères」を考えたのではないか。1620人という構成員の数は、810分類される性格の男女を考慮した数字である。それとは別に黄金率に関する162という数字へのこだわりがフーリエにあったのでは。「諸情念は生きた数学である」という表現についてコメントがあれば伺いたい。

福島会員のリプライ

黄金律に関しては興味深い、宿題ということにさせていただきたい。

### 2 恒木健太郎会員（専修大学）

フーリエに見られる、環境をデザインすれば人間が行動を変えるという発想は、昨今の、行動心理学分析に基づく行動経済学（ナッジ）が考える行動主義的な見方と類似していないか。この行動主義は、人間を動物に還元する見方であるとアレントが批判したものである。この視点に立てば、フーリエの構想は悪

しき目的論的思考に陥っているという批判が成り立つが、それをどう考えるべきか。その答えを「出会いの偶然性」に見出しうると考えられるが、目的がわからないままに誘導される設計主義的とも見えるファランジュ構想の全体と、クロエの話のような出会い偶然性の強調は、どのような関係にあるのか。

ナッジの誘導作戦と、フーリエの設計は似て非なるものだと思うがどうか。発想の違いがあるとすれば、どのように何が違うのか。システムのなかに偶発性を織り込むにはどのようにすればよいのか。意見を伺いたい。

#### 福島会員のリプライ

たしかに、フーリエの構想のなかに、設計主義的なものと偶発的なものを見るという見方はある。強調しておきたいのは、従来フーリエの情念論は心理学として解釈されてきたが、むしろ存在論的次元で捉える必要があるとことである。「たくまれた偶然の接触」、「気まぐれ」という例外的なものの中に、ある種の解放の可能性を見出せるのではないか。

#### 藤田会員のリプライ

偶発性をどのように設計するかという表現自体が矛盾を呈するけれども、たとえば「蝶々情念（移り気情念）」を解放する日課のプログラムとか、ファランステールの端に設置された隊商宿における交流、旅行における出会い、そこに偶発性創設の実践が見られると思う。

#### 金山会員のリプライ

フーリエの世界において、諸個人にナッジされている意識があるのかどうか。システムに組み込まれている意識をもっているかどうかが重要ではないか。

### 3 渡名喜庸哲会員（立教大学）

文明と調和の関係、ユートピアの位置付けについてお訊きしたい。ドゥルーズ的に現実の中にヴァーチャルなものが現れるという事柄をフーリエの世界でどのように考えるべきか。福島氏の現在にあるものなかにユートピアを発見するというユートピアの解釈に興味をもったので、もう少し説明してほしい。

#### 福島会員のリプライ

クロエの例は日常生活のなかでの、「きまぐれ」によるユートピアの発見という話である。『愛の新世界』では壮大な物語が多いのに対して、『産業の新世界』ではむしろ産業革命の進展やパリ社会の日常に注目がなされていることを指摘しておきたい。

### 4 赤羽悠会員（早稲田大学）

デュルケムなどは、社会秩序形成のために情念をどのように抑えるかという発想をとるが、フーリエの場合は逆に情念の展開が社会秩序を生み出すという発想をしているのが興味深い。では、情念の展開を妨げるのは何か。現実の何を批判しているのか。フーリエにとって何がターゲットか。敵は何かお訊きしたい。

#### 篠原会員（世話人・司会）のリプライ

先ほどから議論になっている「人間が変容するのだろうか」という問いに対しては、フーリエは「情念は不変である」と答えるだろう。むしろ、その組み合わせが引き起こす「情念運動」が重要である。では、情念の発展を妨げているものは何か。それは、とりわけ情念の発展を妨げる「単婚家族(モノガミー)」である。情念調和の実現には、情念を広い社会領野に解き放つことが必要であり、「情念運動」の新たな分岐を生み出すことが重要である。たとえばフーリエ自身は 35 歳のときに、自らが「女子同性愛擁護者」であることに気づくが、もし文明を越える社会的な交流があればもっと早くに気づいたかもしれない。フーリエが強調したいのは、より広い社会領域での「自らの情念の発見」ではないか。調和において諸個人は「無限に小さい奇癖」をきっかけに、同種の嗜好を持った同士を求め、移動、旅をすることになる。それは「絆を広げるものは善である」というフーリエの原則に合致している。

フーリエのユートピアの布置について。フーリエは『四運動の理論』で、何でもかんでも不可能だと嘆いているだけの文明人を「不可能主義者」と批判しているが、フーリエのユートピアは、可能・不可能の二項対立における不可能性を示すものではなく、潜在的なものの現働化をさせることによって、文明から調和への不断の移行を図るものではないだろうか。たとえば、不貞のような文明において不和をもたらす悪徳のなかに調和の萌芽を見出すといった具合に。文明の下に隠された調和の「兆候読解」が必要であると言えるだろう。

設計主義について。情念の発露と発展を自己目的とするファランジュは、基本的に設計主義的ではないと思われるが、たとえば、詳細に決められた調和人の日課の描写は、ジャック・ランシエールが指摘していたように、当時の労働者の嫌悪を生み出しもした。たしかに、「管理か自由の発露か」という両義的な部分が、フーリエ構想には常にあることも事実だ。

#### 大塚会員のコメント

概ね篠原氏のまとめに賛成で、たしかに、パートナーのマッチングを図る狂宴は、組織化された出会いであるが、そこでの偶発的な「情念の発見」もあると言える。フーリエの世界では「情念の発見」が重要である。

#### 福島会員のコメント

フーリエの設計主義的に見える側面は、「規範」ではなく「記述」であることをつけ加えておきたい。

(文責：篠原洋治)